

Clinical Subtypes in Children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder According to Their Child Behavior Checklist Profile

香月, 大輔

<https://hdl.handle.net/2324/4474999>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名：香月 大輔

論 文 名：Clinical Subtypes in Children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder
According to Their Child Behavior Checklist Profile

(子どもの行動チェックリストに基づく注意欠如・多動症の児童の臨床的
サブタイプに関する研究)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

背景：本研究では、親が子どもの行動チェックリスト（CBCL）で評価した情緒と行動の問題のパターンによって同定される、注意欠如・多動症（ADHD）のサブグループを特定することを目的とした。

方法：児童精神科外来を受診した子どものうち、DSM-5の診断基準に基づいてADHDと診断された314人の児童（4歳から15歳）を研究の対象とした。クラスター分析を実施し、併存する精神疾患、全般的な社会生活機能、薬物療法についてクラスター間で比較を行った。

結果：CBCLの症状群尺度を用いてクラスター分析を実施し、4つの異なるサブグループを得た。「高内在化・外在化」群は、CBCLにおいて内在化問題と外在化問題の重複を示した。また、「高内在化・外在化」群は、自閉スペクトラム症を併存する割合が高く、自閉スペクトラム症の特徴もより強く有していた。「不注意・内在化」群は、DSM-5で特定される、「不注意優勢に存在」しているADHDが多く見られた。「攻撃性・外在化」群は、反抗挑発症と素行症を併存している割合が高かった。「低精神症状」群は、すべての症状群尺度で低得点であった。

考察：ADHDの児童は、内在化問題と外在化問題の有無によって特徴づけられる4つの異なるサブグループに分類された。内在化問題と外在化問題の重複には、情動制御障害とそれに関連する神経生物学的基盤が仲介している可能性が示唆される。